▲資料室にある「岡山県医学校（1880－1888）」の図。
原本は池田家文庫

# 特集 医学部 創立140周年

1870（明治3）年に創設され、国内有数の歴史と伝統を誇る岡山大学医学部が今年、140周年を迎えました。11月3日の記念式典を前に、これまでの歩みを振り返り、優秀な人材を輩出し続ける特徴的な教育や、一層の飛躍へ向けた取り組みを紹介します。

THE 140TH
OKAYAMA UNIVERSITY MEDICAL SCHOOL
―創立150周年に向かって―
Renaissance Years to the 150th Anniversary

## 歴史が紡ぐ信頼と実績

江戸時代以降、医療先進地域として知られてきた岡山県。津山藩で発展した蘭学や備中国足守藩（現在の岡山市北区足守）出身の緒方洪庵が興した適塾、東洋と西洋の折衷医術・華岡流外科などの流れを汲んだ医師たちが活躍したこの地に1870年、岡山大学医学部の源流となる岡山藩医学館が誕生した。医学館は数度の変遷を経

◀1922（大正11）年建設の医学部正門。岡山医科大学の正門として建てられ、歴史と伝統を今に伝える。国の有形文化財（建造物）

「10年ルネッサンス」を語る▶
許南浩医学部長

て、1922（大正11）年、中四国唯一の医科大学・岡山医科大学に。さらに1949（昭和24）年創設の岡山大学の母胎となり、中四国の最難関学部として現在に至る。

「140年の財産は、1万2千人の卒業生が岡山県や中四国はもちろん、全国各地に分散し、第一線で地域医療を担っていること。大学病院と直接連携している医療機関だけで約250もあり、それぞれの地域で実績を重ね、高い信頼を生んでいる。そして、この信頼が各地の優秀な高校生を岡大医学部に引き寄せ、次世代を担う卓越した医療人を輩出し続ける基盤となっている」と、許南浩医学部長は胸を張る。

## トップレベルの診療、研究

地域密着の一方で、併設の大学病院とともにトップレベルの診療・研究レベルを誇る医学部。140年の中で、梅毒の特効薬を開発した秦佐八郎（1873―1938）や、新種の寄生虫を発見した桂田富士郎（1867―1946）ら医学発展に寄与した人材を多く輩出した。また、日本初の本格的な相互生命保険会社を設立した矢野恒太（1866―1951）、日本初の孤児院を創立した石井十次（1865―1914）、川崎医科大学などの創設者・川崎祐宣（1904―96）ら福祉や社会保障分野に貢献した人物も送り出し、アジアのノーベル賞といわれる「マグサイサイ賞」を受賞した三木行治・元岡山県知事（1903―64）も卒業生に名を連ねる。

現在も、臓器移植や遺伝子・細胞治療、小児心疾患などの先進医療で世界をリード。「基礎研究から新たな治療法の開発まで、医学部や病院の先進的な活動は、毎日のようにマスコミで報じられている」（許医学部長）こともその証だ。「がんプロフェッショナル育成プロジェクト」などの取り組みも進んでいる。

## 特色ある教育

2004年の臨床研修の義務化で、大きな転換期を迎えた医科教育。医学部は近年、新たな教育プログラムを相次いでスタートさせ、学生から研修医、大学院生まで連続性を持った〝シームレスな人材育成〟や女性医師のキャリア支援に力を入れる。臨床研修義務化前後で、医学部で学ぶ研修生の本学と他大学の比率は同程度と変わっておらず、教育改革を推進した前医学部長で140周年記念事業実行委員長の松井秀樹教授は「臨床に強く、科学的な裏付けもしっかりした『良い医者』になりたいという優秀な学生が集まっている」と説明する。

## さらなる飛躍へ

医学部は今年、140周年記念行事として優れた研究成果や教育内容をPRするセミナーやイベントなどを数多く開催。平行して、学生や市民に開かれたキャンパスにするため、プロのアドバイスを受けた長期的な整備計画も進行している。

許学部長は「式典がある11月3日が、150年に向けた『10年ルネッサンス』の出発点。力を合わせて教育、研究のレベルを一層高め、全国で『岡山大学は先導的ですばらしい』と呼ばれる10年後を目指す」と力を込める。

▲前医学部長の松井秀樹教授

# 特集 医学部創立140周年

140年もの間、最先端を走り、変わらぬ信頼を得つづけられたのは、ハイレベルな教育が優秀な人材を生み、彼らが診療・研究にいそしんできたからこそ。現在、進められている特徴的な教育・研究プログラムを紹介します。

▲外科実習に臨む医学部生

◀卒後臨床研修

取り組み紹介

## シームレス人材育成

岡山大学医学部の信頼を支える教育システム。近年、学部から研修医、大学院にいたるまで、〝継ぎ目のない（シームレス）〟人材育成に取り組み、輩出する人材の一層の質向上を目指す。

具体的にはまず、3年時に3～4ヵ月間行う「医学研究インターンシップ」。2001年に始まり、研究先は学内外はもちろん、国内外も問わない。例年、約100人の学生のうち2、3割が海外で行い、著名なハーバード大やコロンビア大に赴く学生も。事前に半年以上かけ、語学や医学の基礎をトレーニングし、「万全の準備で送り出している結果、派遣先から非常に優秀と評価され、『Nature』など有力誌の共著で掲載される学生もいる」と松井秀樹教授は誇る。

新臨床研修制度で研修医制度が大きく様変わりした中、2008年から始めたのが「ART（アドバンスド・リサーチ・トレーニング）プログラム」。卒後臨床研修と大学院の研究を同時にスタートでき、文部科学省の大学院支援プログラムにも採用された。導入後、他大学からも含め、大学病院での研修者が増えており、「優秀な人材にとって非常に魅力がある制度」（松井教授）となっている。

さらに、2009年からは、学部と大学院の隙間を埋める「プレART プログラム」をスタート。医学研究インターンシップで研究を始めた学部生が、その研究を続けつつ、大学院の授業も受けられる。大学院の授業のうち、座学部分を学部で受講することで、大学院生になったときに研究にたくさんの時間を充てられるメリットもある。「忙しいカリキュラムの中でも自主的に研究室を訪れ、教員の指導のもと、熱心に研究を続ける学部生が多い。5～10年後には大きな成果となり、念願のノーベル賞候補が出てくるかもしれない」と松井教授は期待する。

このほか、見学型ではなく診療参加型の実習を行い、患者に触れることで医師としての自覚を高める「スチューデントドクター」など、現実に即した教育を重視。ITP（インターナショナル・トレーニング・プログラム）という大学院生や若手研究者の海外派遣制度も大きな成果を上げている。「医学部生は日進月歩の医療についていくため生涯勉強を続けるので、キャリア支援は非常に重要。教養教育段階も含め、第一線の医療機関と一緒に、あるいは、地域の医療機関のネットワークで教育する系統的な体制を整えていく」と許南浩学部長は力を込める。

▲参加型実習で学ぶスチューデントドクター

◀「女性を生かすキャリア支援計画」ホームページ

取り組み紹介

# 女性医療職支援

医師、看護師ら女性の医療職が働きやすい環境づくりも特徴の一つだ。今年度から「医療人キャリアセンターMUSCAT」を医歯薬学総合研究科に設置し、短時間労働など柔軟な勤務の普及や子育て相談、病児保育といった支援で、出産・育児などで離職した女性医療職の復帰を後押しする。

この取り組みは、2007年から文部科学省の支援事業に採択され、今年度からは県の地域医療再生計画にも盛り込まれた。許学部長は「医学科入学者の3割は女性。地域医療のボリュームを高めるためには女性の力を活用することが重要」と強調する。

復職支援のための▶シミュレーショントレーニングコース

取り組み紹介

# がんプロフェッショナル養成プログラム

2006年に始まった「がんプロフェッショナル養成プログラム」では、広範な医療人を育成。岡山大を中心に中四国の拠点施設が連携し、医師だけでなく、抗がん剤の最適な調合や投与ができる薬剤師、外来での抗がん剤治療などで必要な特別なケア技術を持つ看護師といった専門家を養成する。

厚生労働省の支援で始まり、緩和治療学講座も設置。松井教授は「次第に定着しつつある」と評価する。

## 医学部140周年 記念行事

140周年を記念し、14のセミナーやシンポジウム、主催学会などを開き、地域社会や医学関係者に、医学部の功績と現状をPRしています。11月3日の記念式典では、これまでの歩みと150周年へ向けた取り組みを紹介するとともに、卒業生の江草安彦・旭川荘名誉理事長の記念講演があります。

歴史ある建物の修復保存、貴重な所蔵資料を展示する資料館やセレモニーホールの建設など、長期的視野にたったキャンパス整備構想も進行中です。

▲資料室が所蔵する貴重な資料の数々

記念行事の詳細はホームページ
**http://www.okayama-u.ac.jp/user/med/profile/aniv140.html** をご覧ください。